

平成州紙



おりおりの記

運用の世界に転じた頃の思い出 (素人の恥を忍ぶ回想)

日本投資顧問業協会
会長

岩間 陽一郎

聊かレベルの低い恥を忍ぶ話になってしまうのであるが、社命とはいえ未経験の資産運用に40台半ば過ぎで携わることになった事は大きな驚きであった。この分野の専門性は皆無と言ってよく何から勉強すれば良いのか戸惑った次第であった。当時はまだバブル崩壊が始まったとは言え日本経済の体温も温かみが残っており、運用の多様化も緒に就いたばかりで、ビジネスチャンス機関投資家のマニフェスト獲得に求める内外の運用会社が会社に来てくれる機会も多かった。キャッチアップする為にはお話を伺い耳学問で補うことが役に立つであろうと考え時間の許す限りとにかくお会いして教を乞う事とした。会話の中から拾った理解不足の点や疑問点を後で社内のエキスパートに解説してもらい参考文献で確認していくのである。

全くいい加減なもので恥ずかしい限りであるが時間の経過を考えると仕方がなかったのである。エキスパートであることの上に経営能力が備わるという道順は小生には初めから閉ざされていたのであるから。海外からの訪問者にどう対するかには別の覚悟が必要であった。時間を有効に使う為には通訳なしで直接対話するしかないという覚悟するのは大事であった。前の仕事の場合はこのような環境には程遠いものであったから貧弱な英語力で対応するのは相当厚かましい話であった。恐る恐る始めて見たのであるが、場数を踏むうちに来る人は異なっても話題は同じであることも多く、驚く

ことに小生の英語の下手さ加減など頓着せず結構盛り上がることに気が付いたのである。英語の上達は覚束ないが度胸だけは聊か据わったように感じている。



協会に来てからもこのスタイルであるが、もっとしっかり身に着ける努力をしておくのであったという後悔の念は未だに付き纏う。

英語は何故に圧倒的な世界語の地位を確立不動のものにしたのであろうか？

産業革命を起し、植民地経営の先端を走り覇権国として長く君臨したことが大きいのであろうが、中国語、アラビア語、フランス語、スペイン語等々これにとって代わる可能性のあった言葉もあった筈である。漠然たる疑問を抱いていたのであるが、メルヴィン・ブラッグの書いた『英語の冒険』という本を読んで謎が解けた気がする。覇権国であった事に加えて度重なる多民族の言語との衝突を克服しその都度貪欲に吸収し進化し続けるしたたかなまでの柔軟性をもっている言葉なのである。これからも謙虚に精進が肝心と思うこの頃である。